

# 桑 戸 (後町) 遺 跡

KUWADO (USIROMATI) SITE



1993. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

## 序

春日居町は甲府盆地東部に位置し、町内には国府・鎮目などの地名が残り、白鳳時代の寺本廃寺が存在するなど、古代より甲斐國の中心地として知られた地域であります。遺跡は古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が平坦部に広がり、西側の山裾から山間部にかけては、後期古墳群が存在しております。このことから、古墳時代からにわかに人口の集中が始まり、白鳳時代・奈良時代に隆盛をみた地域ということができます。

県道上神内川・石和停車場線は、町の中央を南北に貫く幹線道路ですが、幅員が狭く車両の通行障害となっていました。このため拡幅工事が計画され、1991年度までに小松地区から加茂地区にかけては工事が実施されました。この間の遺跡は、大部分が天地がえしのために造構が擾乱され、遺物の散布が認められるだけでしたが、本年度の工事地区は、試掘調査の結果、造構が良好に残存していることが明らかとなり、塩山土木事務所と協議の結果、急速発掘調査を実施することになりました。発見された遺跡は、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器などであり、奈良・平安時代の住居跡が5軒、溝2条、土坑などあります。

本遺跡は笛吹川右岸に形成された自然堤防上に立地した集落遺跡で、幾つかの遺跡が濃密に集合し、国府・寺本廃寺を中心とした一つのまとまりを示しております。おそらく国府・寺本廃寺などを支えた一般住民の集落と考えられますが、住居主軸の方位が極めて統一されているため、国府に強く規制・監督された集落と見なすことができます。今回は道路拡幅に伴う調査であり、集落全体のほんの一端を垣間見たに過ぎませんが、古代甲斐國の中心部として注目される地域であり、今後も周辺の開発には注意を払う必要があります。

末筆ではありますが、本調査にご協力をいただいた方々に、厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 磯貝正義

## 目次

序
目次
例言
第1章 環境……………1
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第2章 発掘調査経過……1
第1節 調査日程
第2節 調査組織
第3節 調査方法
第3章 遺構と遺物………3
第1節 住居跡………3
第2節 溝………7
第3節 土坑・ピット…15
第4章 まとめ………20

## 例言

1. 本書は県道上神内川～石和停車場線拡幅工事に伴って発掘調査された、桑戸（後町）遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、山梨県土木部の依頼を受け、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の出土品及び記録は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
4. 本書の執筆は、末木 健・野代幸和が行った。

# 第1章 環 境

## 第1節 地理的環境

本遺跡は、甲府市東部に接し、秩父山塊の南端、兜山・御室山の東側平坦地、標高292~293mの自然堤防上に立地する。自然堤防は笛吹川に形成されたもので、遺跡東1kmには笛吹川が流れ、西側1kmには山裾を縫うように平等川が南西に流下する。当地は西側を山に遮断されていることから、冬の季節風が少なく、温暖で過ごしやすい土地である。

## 第2節 歴史的環境

遺跡南約1kmの自然堤防上に白鳳時代の寺本庵寺が在り、その周辺には国府の地名や正倉と想定される遺構などが存在し、飛鳥・白鳳・奈良時代の甲斐國の中心地と目されている。飛鳥・白鳳時代以前の遺跡には、西側山地に寺の前古墳の他30余の横穴式石室をもつ古墳や積石塚古墳があり、古墳からは武器・馬具の他に、銅鏡などの特殊な遺物も出土している。また、寺本庵寺は、1981~1986年の間に町教育委員会によって3回の発掘調査が行われ、法起寺式あるいは川原寺式の伽藍配置と推定されている。なお、国府遺跡からは正倉跡と見られる礎石群が発見されるなど、近辺は古代甲斐國の中心地であった。平安時代に編纂された『和名抄』にある、山梨郡山梨郷はこの地域一帯とされている。

# 第2章 発掘調査経過

## 第1節 調査日程

平成4年11月19日 文化庁に発掘通知提出  
平成4年12月1日~15日 発掘調査  
平成4年12月22日 遺物発見通知提出  
平成4年12月18日~平成5年3月31日 整理・報告書

## 第2節 調査組織

発掘調査主体 山梨県教育委員会 教育長 飯室淳雄  
発掘調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 磯貝正義  
発掘担当者 山梨県埋蔵文化財センター 主査・文化財主事 末木 健  
同 文化財主事 野代幸和  
調査員・作業員 大村昭三、宮坂晴幸、越石 力、内藤安雄、平美与枝、中込よしひ、出月達也、出月満寿江、矢崎米子、土屋ふじ子、米山八重子、塩島富美子(順不同)

## 第3節 調査方法

道路拡幅部分の表土を重機によって削除し、5mグリッドを設定した。北側からA・B・C~区を設定し、調査時の標高は道路建設用のベンチマークを使用した。



記号	遺跡名	所在地	時代	記号	遺跡跡	所在地	時代
A	上町田遺跡	鎮目字上町田	奈生、古墳、平安	J	春日神社裏遺跡	加茂	平安
B	保婆寺機遺跡	"	古墳、平安	K	桑戸後町遺跡	加茂字後町	奈生、古墳、平安
C	大儲遺跡	"字大儲ほか	平安	L	桑戸遺跡	桑戸	平安
D	押田遺跡	"字押田ほか	平安	M	桑戸道遺跡	熊野堂字市道	平安
E	大中寺遺跡	国府字大中寺	平安	N	別田南北遺跡	別田	平安
F	熊野南遺跡	熊野堂	古墳、平安	O	別田北遺跡	別田	平安
G	熊野北遺跡	熊野堂	古墳、平安	P	中川田遺跡	下岩下字中川田	平安
H	神東町遺跡	"ほか	古墳、平安	Q	寺本廃寺跡	寺本	奈良
I	加茂遺跡	加茂字後町	古墳、平安	R	五反田遺跡	桑戸	奈良、平安

第1図 春日居町遺跡一覧表

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 住居跡

#### 第1号住居跡（第3図）

本住居跡は調査区北側のA区において、第3号住居跡と切り合っている状態で検出された。一部調査区外にのびているため、北西側の約3分の1程を調査したにすぎない。規模は一辺が約3.40mほどの隅丸方形プランを呈するものと思われ、確認面から床面までの深さは約0.50mを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。竈は北東側の壁に設置されているが、袖の一部が検出できたのみで、その大部分が調査区外に存在するためプランははっきりしない。遺物は遺構確認調査段階で擾乱した部分を除いて、ほぼ全体的に散在しており、土師器片1232点、須恵器片6点が出土した。

本住居跡の時期は出土遺物からみて奈良時代末葉と考えられる。土層を見てみると隣の第3号住居跡の壁を切るようにして、本住居を造っていることがわかる。

#### 第1号住居跡出土土器（第4図）

本住居跡出土土器には、弥生時代後期の壺破片（11・12）、同壺破片（13）、古墳時代初頭のS字状口縁付壺（14・15）、古墳時代中葉の壺（10）、壺（8・9）などが出土しているが、住居の年代を示すものは1～7の土師器の壺・壺である。1は底部中央に静止糸切り痕を残し、体部下端と底部周辺はヘラ整形され、体部両面には横撫痕が明瞭に残る壺で、2・3も同様の手法によってつくられている。壺には2形態があり、口縁部が厚くくくの字に屈曲する6と、緩やかに外反する7がある。なお、18は須恵器の壺破片であるが器形復元は困難である。

#### 第2号住居跡（第5図）

本住居跡は調査区北側のA区において検出されたもので、一部調査区外にのび、北東側の約2分の1程を調査したにすぎない。規模は一辺が約3.50mほどの隅丸方形プランを呈するものと思われ、確認面から床面までの深さは約0.40mを測る。壁はいくぶん急に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。竈は北東側の壁に設置され、粘土で作られた袖が明確に確認できる。範囲は長軸0.73m、短軸0.65mを測る。遺物は竈付近に集中し、竈の袖付近からは土師器の壺や塊の一括資料が出土した。土師器片323点、須恵器片3点が出土した。

本住居跡の時期は出土遺物からみて平安時代前葉と考えられる。

#### 第2号住居跡出土土器（第6図1～8）

第6図の壺1・2はいわゆる甲斐型壺で、口径が10cm前後と小さいわりに、底径が6cmという断面台形の小径壺である。内面に暗文があり、胴部外面下部にはヘラ削り痕がある。甲斐型壺の編年ではⅦ期に位置付けられよう。3・4は口縁部に特徴をもつ小型の鉢で、外反から直立した胴部がくくの字に屈曲し、口縁部が開く。内外面は横撫整形痕が見られ、外面下部は

ヘラ削りがある。5は大型の坏であろうか。3・4に類似する遺物は県下では出土量は少なく、管見した限りでは、甲府市大坪遺跡河床地点(1984)や桜井畠C地区2号住居(1990)、御坂町姥塚133号住居(1987)、同町二之宮178号住居(1987)と同遺跡グリッドなどから出土している。姥塚133号→桑戸2号→二之宮178号という変遷をたどることができる。奈良時代中葉から平安時代初頭にかけて使われている。6・7は須恵器の壺破片、8は須恵器の坏底部破片である。

#### 第3号住居跡(第3図)

本住居跡は調査区北端のA区において第1号住居跡と切り合った状態で検出されたもので、大部分が調査区域外に存在したため、北西側のコーナー付近を調査したにすぎない。規模は不明であるが、確認面から床面までの深さは約0.50mを測る。プランは隅丸方形を呈するものと思われる。壁は崩れたらしく、かなり緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。竈等の施設は確認できなかった。遺物は、土師器片21点と壺の胸部がややまとまって出土したのみである。

本住居跡の時期は出土遺物からみて古墳時代中葉の和泉期と考えられ、本遺跡発見の遺構の中で最も古い時代に属するものである。

#### 第3号住居跡出土土器(第6図9~14)

第6図9は坏、10は壺口縁部であろうか。11~13は壺・壺・壺などの底部である。14は高坏脚部である。これらは古墳時代中葉に属するものである。

#### 第4号住居跡(第7図)

本住居跡は調査区のほぼ中央北寄りのB・D区にかけて、第2号溝と切り合うような状態で検出されたもので、一部が調査区域外にのびているため、北東側の約2分の1程を調査したにすぎない。規模は一辺が約3.20mほどの隅丸方形プランを呈し、確認面から床面までの深さが約0.30mを測る。壁はいくぶん急に立ち上がり、床面は平坦である。竈は北東側の壁に設置され、粘土で造られた袖が僅かに確認できた。範囲は焚口部から煙道にかけての長軸が0.97m、短軸が0.70mを測る。遺物は竈周辺から南東壁にかけて集中して分布し、土師器片508点、須恵器片1点が出土した。

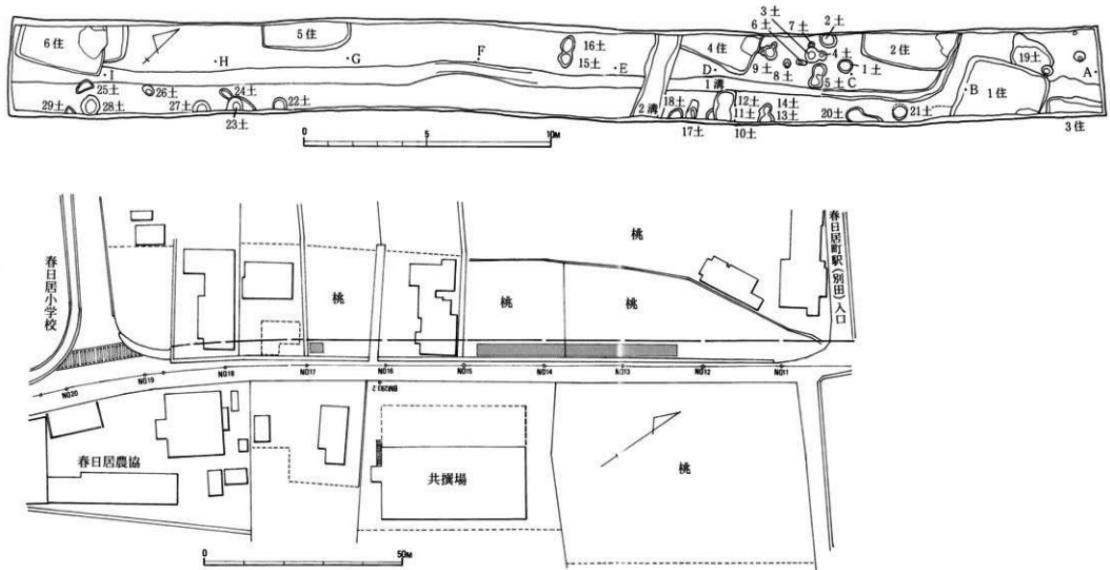
本住居跡の時期は出土遺物からみて奈良時代前葉～中葉頃と考えられる。土層の観察からは第2号溝が本住居跡を切っているように見えるのであるが、それぞれの遺構から出土した遺物を検討した結果、本住居跡の方が新しいことが判明した。

#### 第4号住居跡出土土器(第6図15~18、第7図1・2)

第6図15は古墳時代中葉の高坏脚部で遺構外から流入したものであるが、他は当住居跡に属するものであろう。第6図16と第10図1は内外面に粗い刷毛目を持つ長胴壺で、古墳時代後期の壺に類似する。2は鉢状の短胴壺で、外面は棒状のヘラで整形し、内面は強く横ヘラ磨きが行われている。

#### 第4号住居跡出土石器(第9図11)

これは凹石状の石器で、長径15cm、短径12cm、厚さ8cmの安山岩の平坦面に直径7cm、深さ



第2図 全体図及び発掘調査区域図

2.5cmの擂鉢状のくぼみが穿たれている。これも出土土器が示す時期に伴うものと考えられる。

#### 第5号住居跡（竪穴状造構）（第11図）

本造構は調査区の中央南寄りのD区において検出されたもので、一部が調査区域外にのび、北東側の約2分の1程を調査したにすぎない。規模は一辺が約3.60m程の方形プランを呈するものと思われる。床面はあまりはっきりしない。覆土についてみてみると、他の造構と異なった様相を呈しており、また出土遺物の中に陶器片の混入が認められることから、本造構の時期は近世以降と考えられる。ここでは住居跡としたが、造構の性格から鑑みて竪穴状造構とした方が望ましいと思われる。

#### 第6号住居跡（第8図）

本住居跡は調査区南端の1区において検出されたもので、一部が調査区域外にのび、北東側の約2分の1を調査したにすぎない。規模は一辺が約3.60mほどの方形プランを呈し、確認面から床面までの深さが約0.60mを測る。壁は急に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。カマドは北東側の壁に設置されているが、プランははっきりしない。多量の焼土・炭化物が窓付近を中心とした広い範囲で認められ、これらが1.2~6.7cmの厚さで堆積していた。また貼床が唯一確認できた住居跡であることも記しておく。遺物はほぼ全体的に散在しており、須恵器の長頸壺や土師器の壺等の他、土師器片が351点、須恵器片が57点出土した。

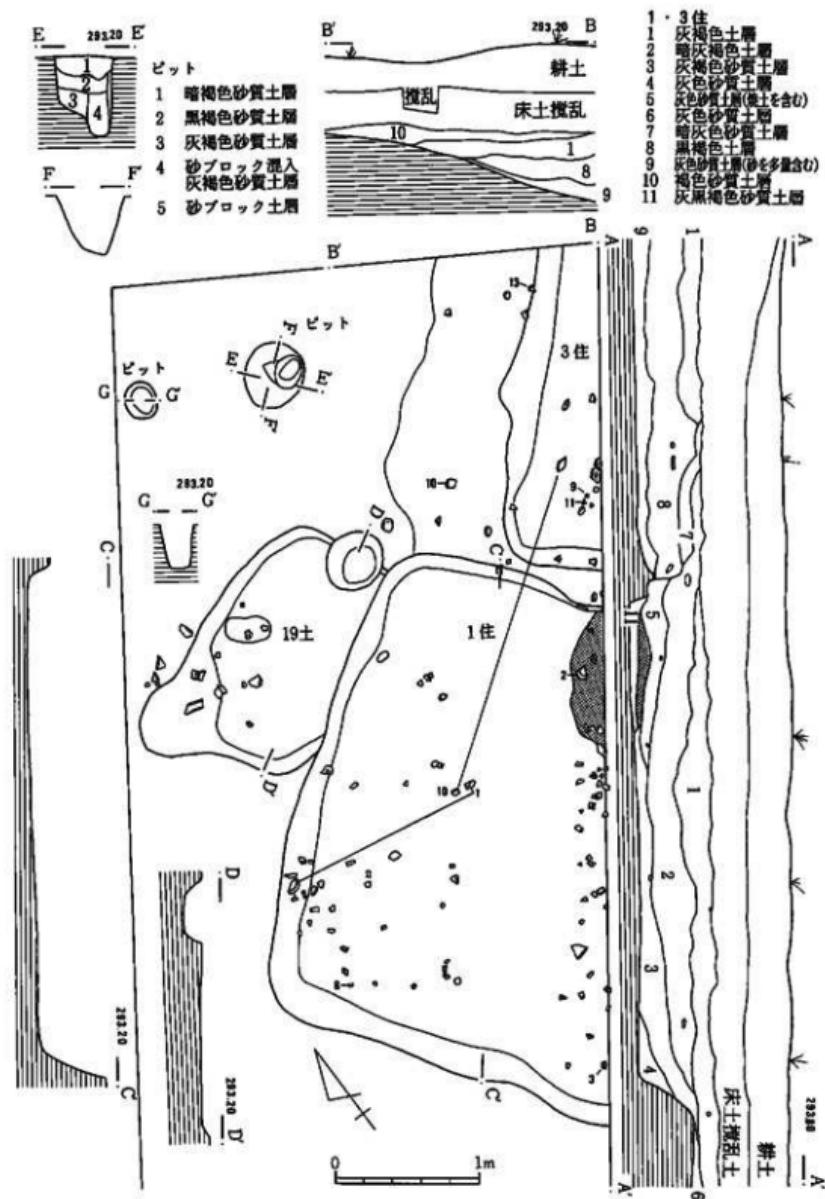
本住居跡の時期は出土遺物からみて平安時代前葉と考えられる。

#### 第6号住居跡出土土器（第9図3~10、第10図）

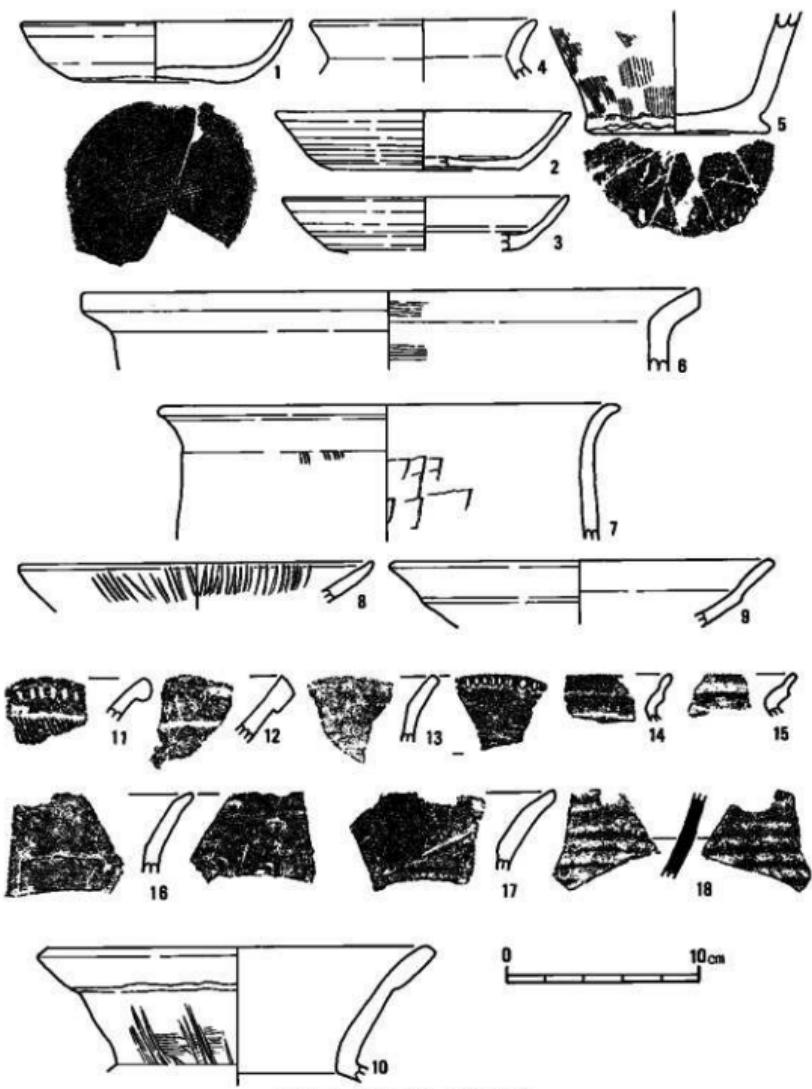
第9図3は内面黒色土師器壺で、口径約14cm、底径約8cmで、見込み部から体部内面に暗文がある。外面は横撫で、下部には横ヘラ削りが認められる。底部は回転糸切り後、周囲をヘラ削りする。同図4~6は壺で、全体を知り得るものはないが、それぞれの特徴を総合すると中期頃の土師器の壺ではなかろうか。8~10は胴部内外面に刷毛目を施す壺で、頸部が屈曲し口唇が尖る。底部は木葉底で、9は周囲をヘラ削りする。第10図1は灰釉陶器長頸壺で釉薬は半分以上が剥離している。猿投縄年では折戸10号窯式に比定することができる。同図2~10は古墳時代中葉の遺物であり、11~12は奈良・平安時代の置壺片であろう。13~19は須恵器の壺破片である。

#### 第2節 溝（第11・12図）

発見された溝は2条である。第1号溝は調査区に沿って走り、B区では南北に向きを変え、第2号住居跡の壁に沿うようにして、調査区外に出ている。溝の幅は0.30m~0.50m、確認面から底部までの深さは0.08m~0.20mを測る。覆土は軟らかくしまりがない。また造構の残存状況が悪かったため、完掘できなかった。遺物は土師器片149点、須恵器片3点が出土した。これらの中には摩滅したものが多く含まれている。また、豚骨の小片も出土している。本溝の時期は、覆土の状態などから近世以降の水田に伴う造構である可能性が考えられる。第2号溝は調査区中央のやや西寄り付近において、南北に走っているもので、幅0.90~1.22m、確認面から底部までの深さは0.20m~0.25mを測る。土層断面を観察すると平安時代に属する第4号

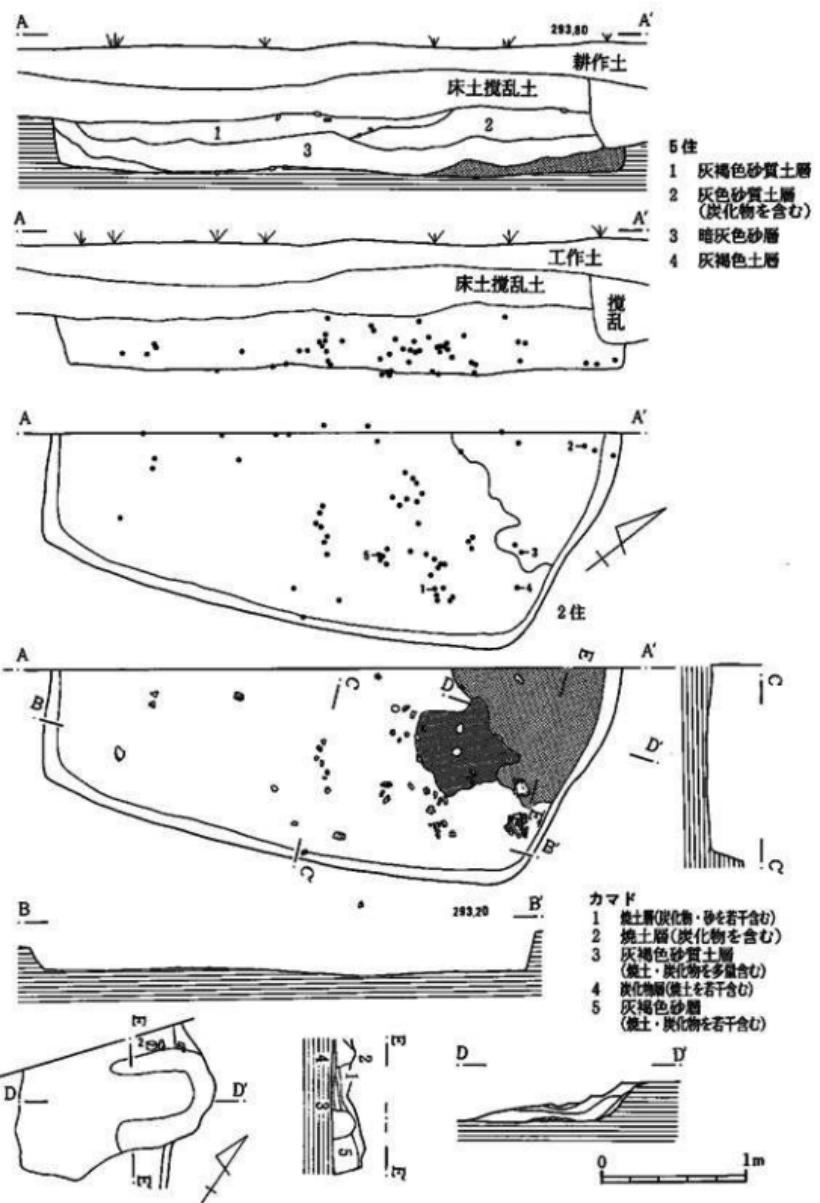


第3図 第1・3号住居跡実測図

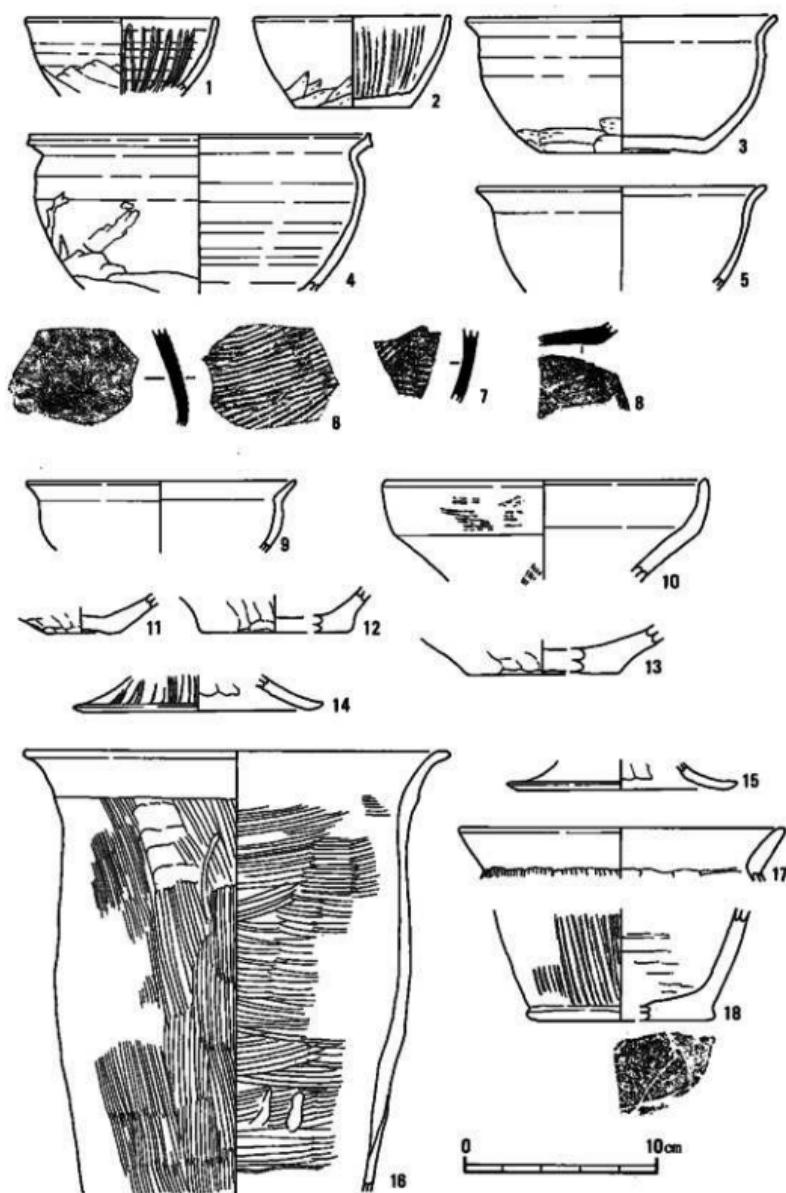


第4図 第1号住居跡出土遺物

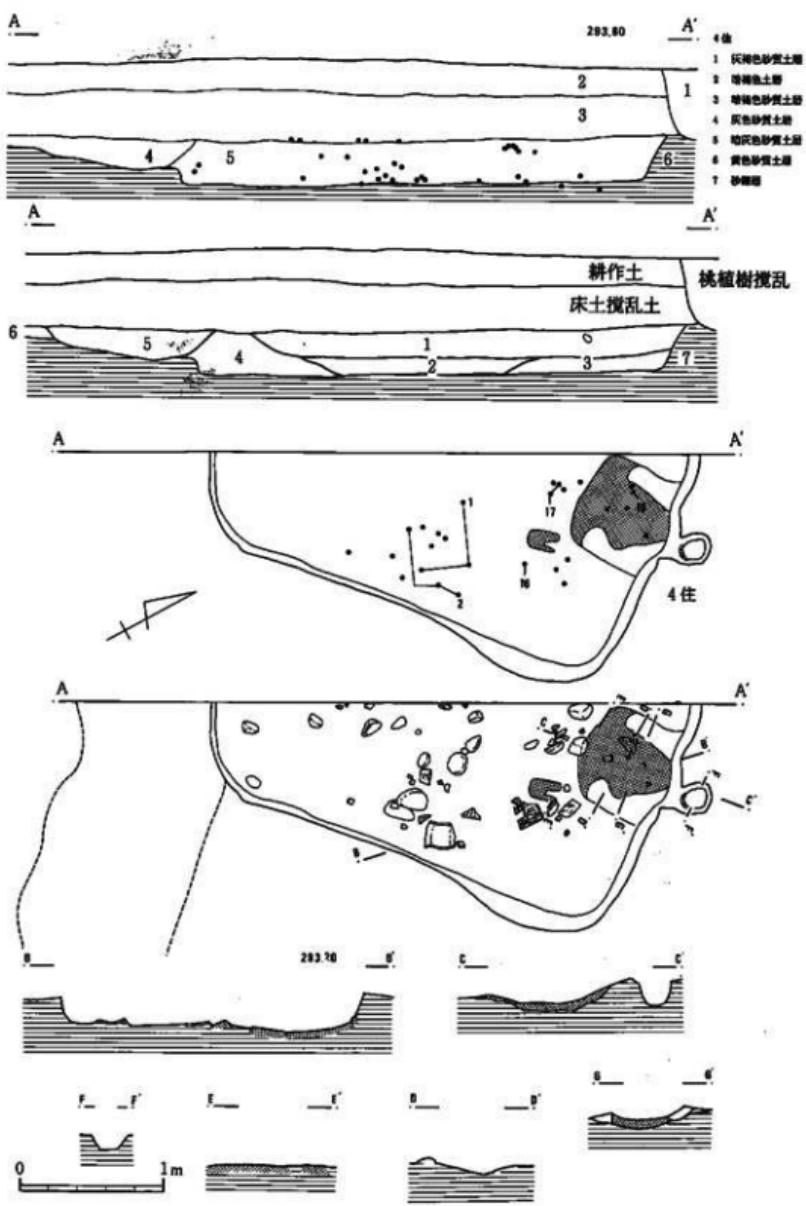
住居跡を本溝が切っているように見えるのであるが、本溝から出土した遺物から判断すると、時期的には奈良時代末葉段階に位置付けられる。遺物は奈良時代末葉～平安時代前葉段階のものを主体とする土師器片が87点出土している。本溝の性格などについては調査面積が狭く不明である。

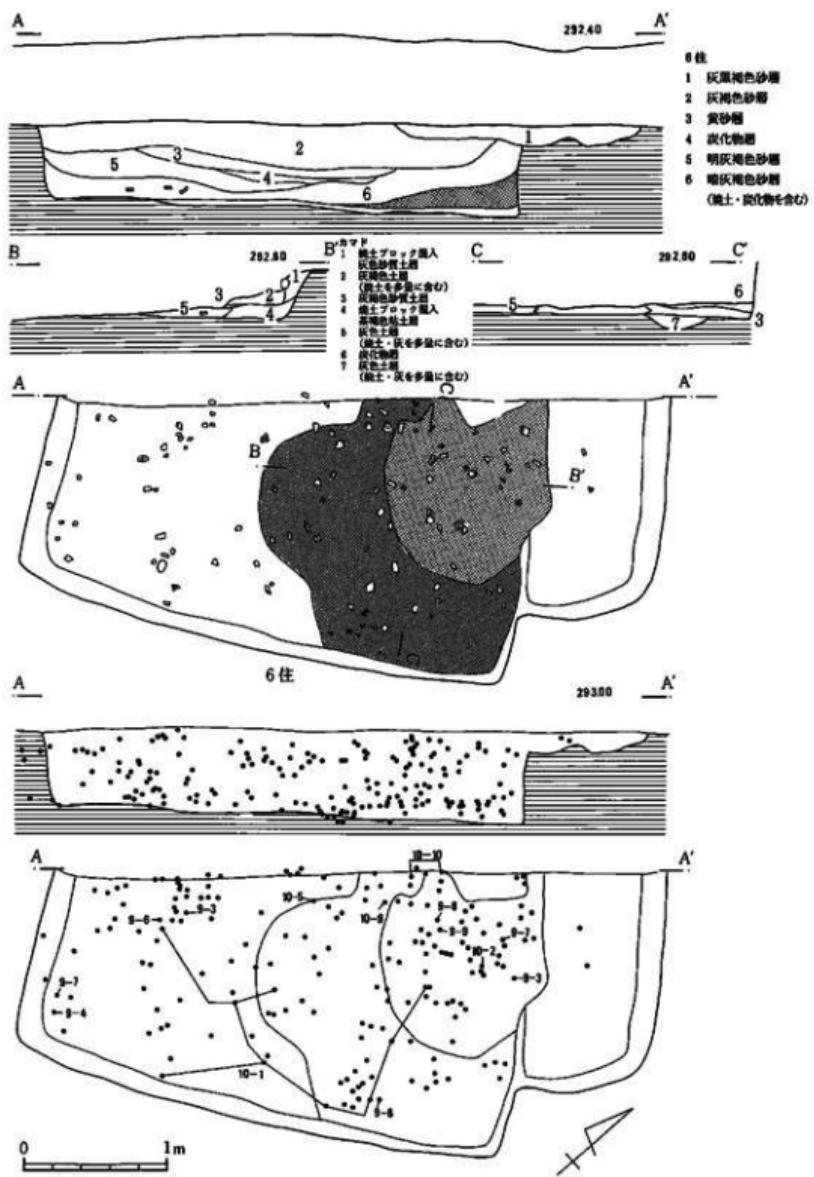


第5図 第5号住居跡実測図

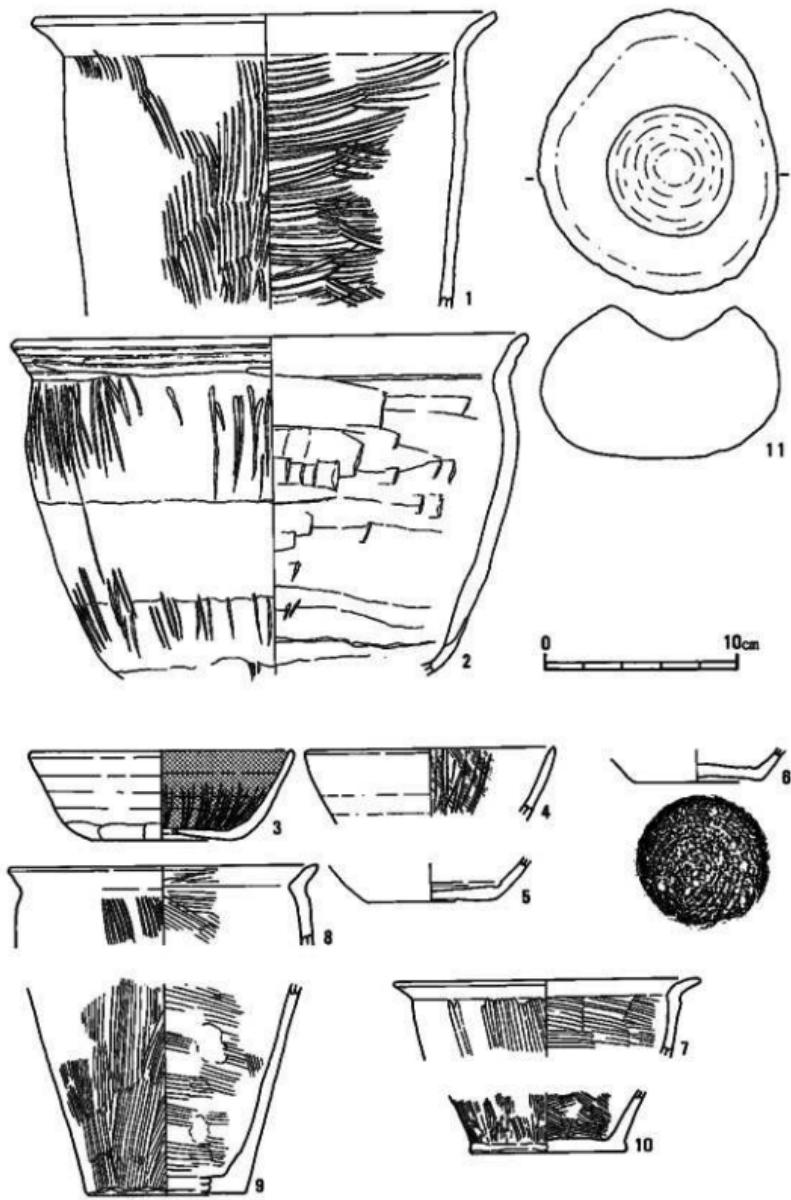


第6図 第2号(1~8), 3号(9~14), 4号(15~18)住居跡出土遺物

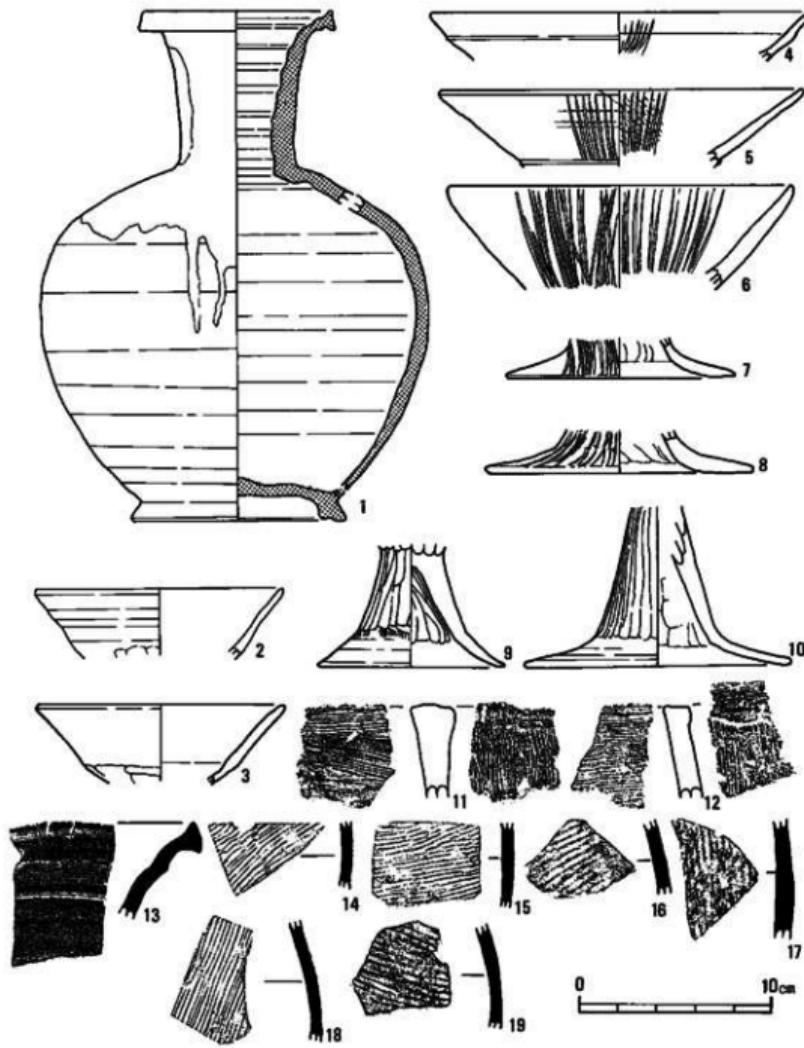




第8図 第6号住跡実測図



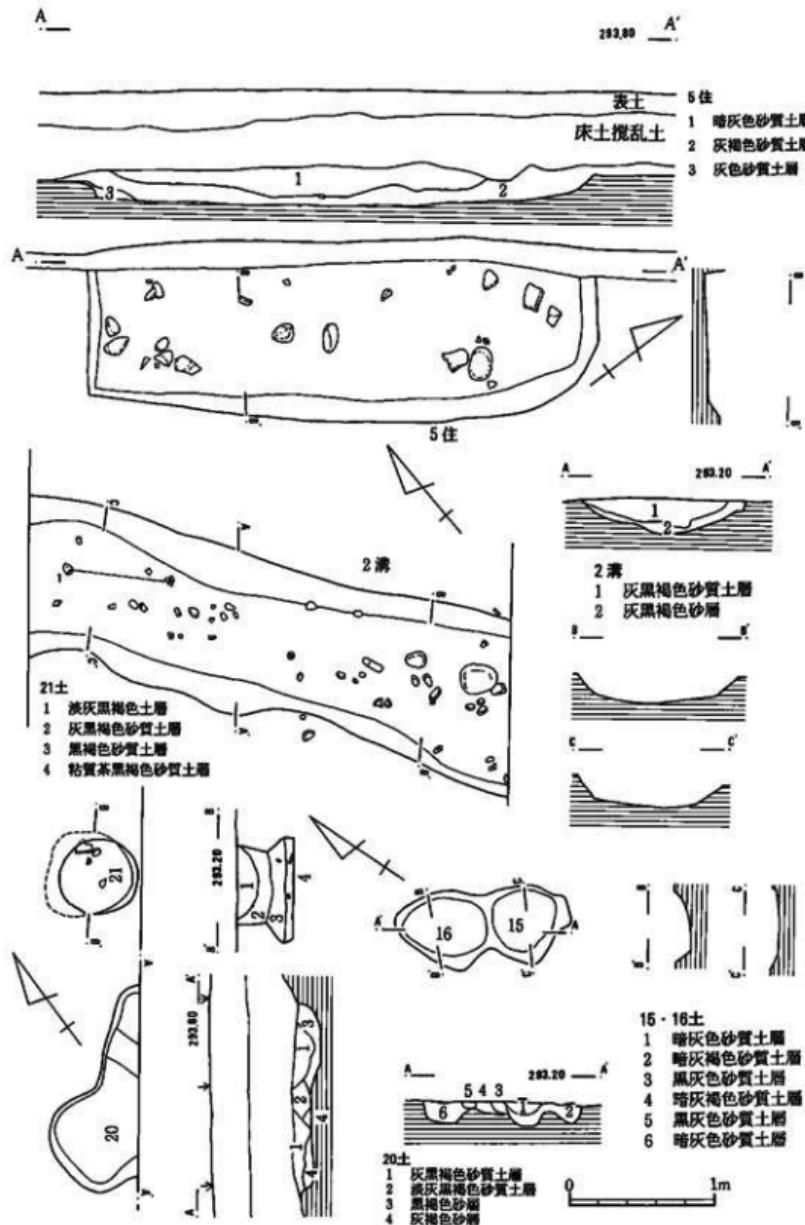
第9図 第4号(1・2), 6号(3~10)住居跡出土遺物



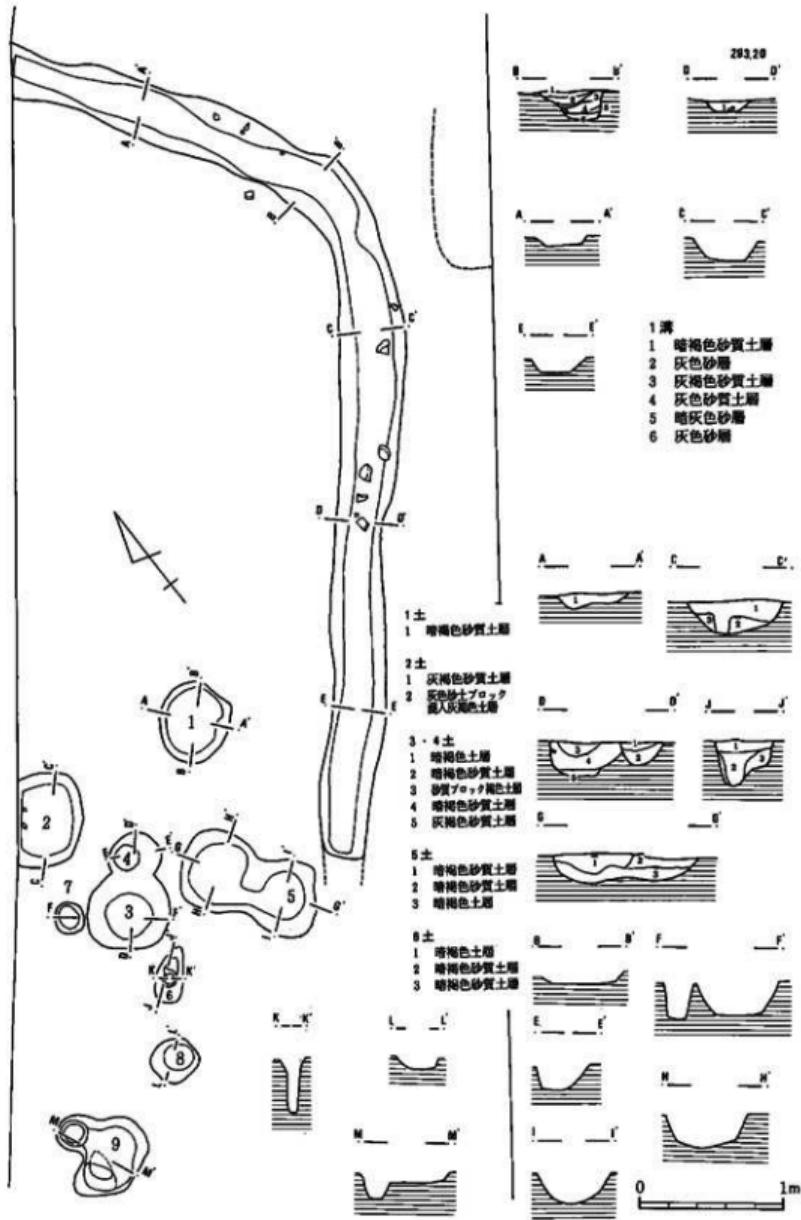
第10図 第6号住跡出土遺物

### 第3節 土坑・ピット（第3・11・12・13・14図）

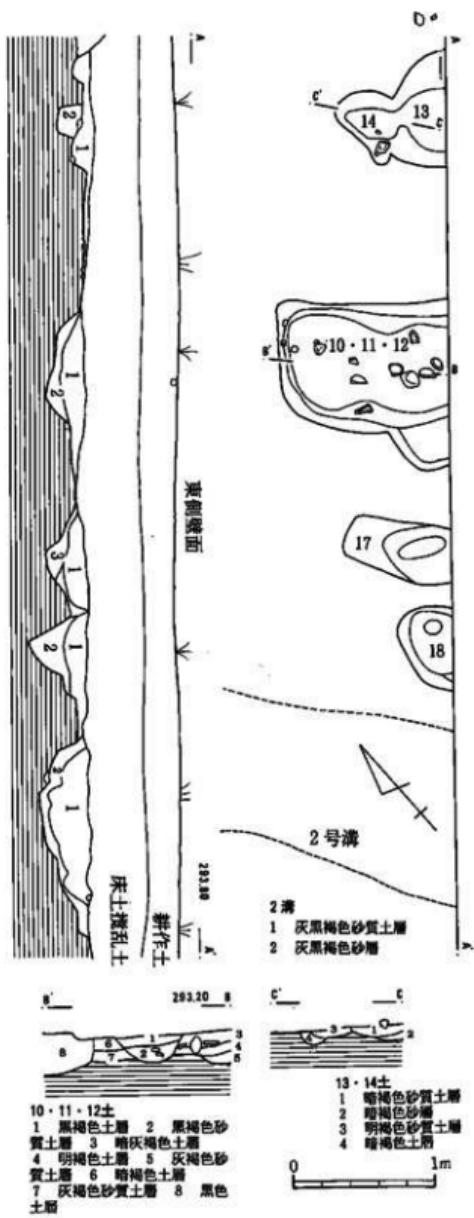
発見された土坑は全部で29基で、この内完掘できたものは19基である。また明らかに柱穴と思われるピットが2基確認できた。土坑については、F区を除くすべての地区で発見されてい



第11圖 第5号住、第2号溝、第15・16・20・21号土坑実測図



第12圖 第1号溝、第1~9号土坑実測図



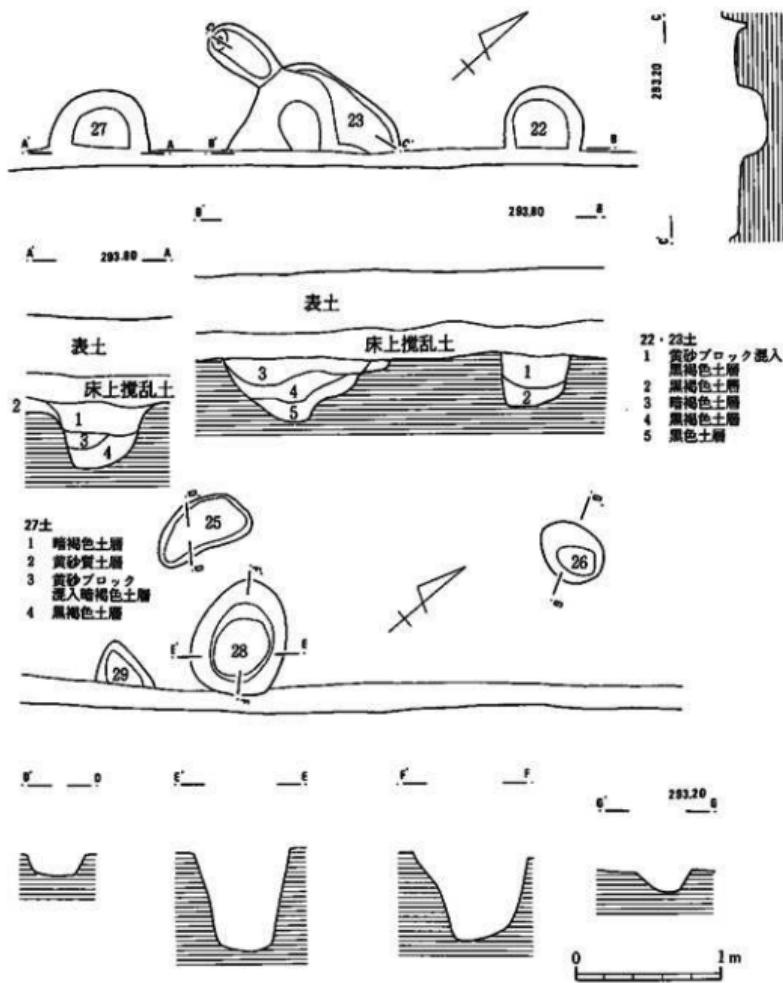
第13図 第10～14・17・18号土坑実測図

る。その分布には偏りが見られ、調査区北側と南側部分にそれぞれ集中している。またこれらのほとんどが、住居跡周辺に接近して存在することから、これらの土坑は生活に密着した状態で造られたものと思われる。遺物については、主に平安時代の土器を主とし、その総数は土師器片35点、須恵器片2点である。時期については、出土遺物から大部分のものは、平安時代に属するものと考えられるが、第24号土坑は、他の土坑の覆土と異なり、また遺物も伴わなかったため時期は不明である。これら土坑の性格については、大部分のものについては不明である。しかし、若干性格の掴めるものもある。第6・7号土坑は柱穴状を呈する。第8号土坑は覆土に多量の焼土を含み、壁面が焼けていた。第21号土坑は断面がフラスコ形を呈し、底部で土器がややまとまって出土した点などから、貯蔵穴である可能性が考えられる。

ピットについては、調査区北側の第3号住居跡の北側で検出された。第1号ピットは長径が0.55m、短径0.46mを測り、かなりしっかりしたものである。遺物は平安時代の土師器片が16点出土した。第2号ピットは長径が0.30m、短径0.26mを測る。これらピットの時期については覆土や出土遺物から平安時代と考えられ、周辺に存在する遺構に伴う可能性がある。

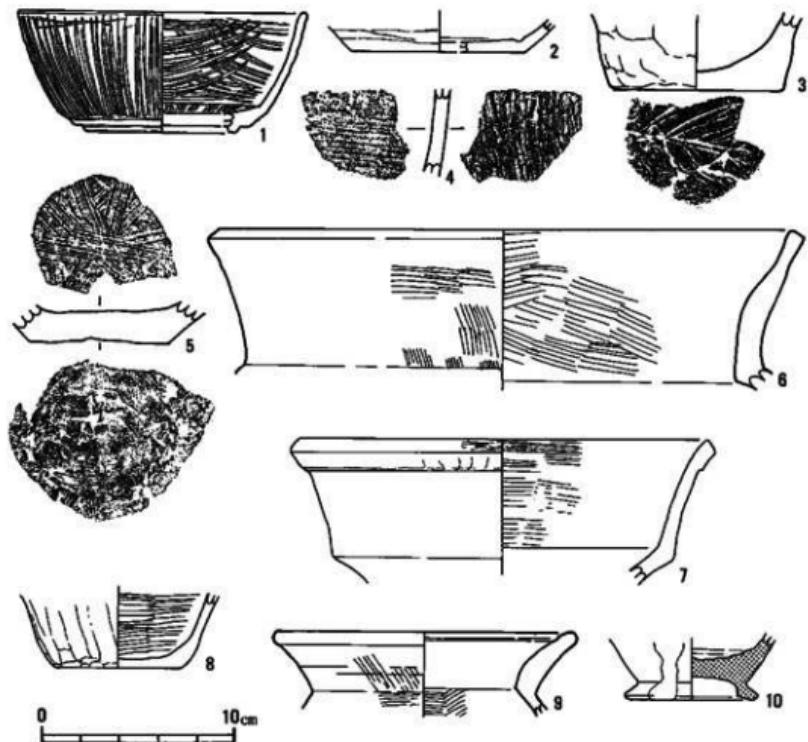
#### 溝・土坑・ピット出土遺物（第15図）

1～4は第2号溝出土である。1



第14図 第22～29号土坑実測図

は外面縁暗文が施された高台付坏で、器形・整形から甲斐型坏の初現期（8世紀第3四半期～第4四半期）に属すると考えられる。5は第10号土坑、6は第14号土坑、7・8は第19号土坑、9・10はグリッドの出土である。



第15図 溝、(1~4)、土坑(5~8)、グリッド(9・10)出土遺物

## 第4章 まとめ

桑戸遺跡が存在する春日居町は、古代山梨郡山梨郷に属し、奈良時代には国府（甲斐國の中央官庁）があったと想定されている。この地域では、古墳時代～平安時代に至るまで、継続的に生活が営まれていたことが、今までの発掘調査で明らかにされている。

さて今回の調査では、住居跡5軒、竪穴状造構1基、溝2条、土坑29基、ビット2基が検出され、遺跡の内容が明らかとなった。桑戸遺跡で最初に生活の痕跡が見受けられるのは、古墳時代中葉の5世紀前半である。この後、平安時代前葉の9世紀前半に至るまでの住居跡が発見されており、周辺遺跡との時期的なつながりが示唆される。

今回検出された奈良時代末葉～平安時代前葉に位置づけられる住居跡の特徴を上げると、竪の向きと主軸を示す方向がほぼ共通しており、この付近にも当時の行政組織による規格的な区画整理事業（条里制）によって、住居域が区画されていた可能性が考えられる。

これらのことについて確証を得るには、より広域的な調査の結果を待つしかなく、今後の課題としたい。

図版 1



遺構確認状況



調査状況



第1・3号住居跡遺物出土状況



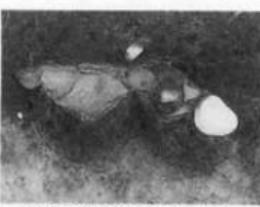
第2号住居跡遺物出土状況



第1・3号住居跡完掘状況



第2号住居跡完掘状況



第3号住居跡遺物出土状況



調査状況



第2号住居跡器出土状況

图版2



第4号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡完掘状況



第6号住居跡完掘状況



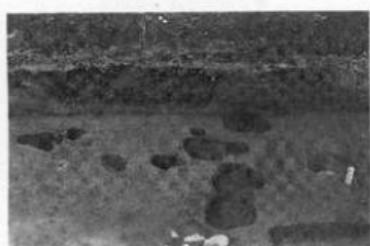
第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡窓周辺遺物出土状況



第6号住居跡窓周辺遺物出土状況



第1~9号土坑完掘状況



第2号溝遺物出土状況

## 桑戸（後町）遺跡発掘調査概要

フリガナ	クワド（ウシロマチ）イセキ
書名	桑戸（後町）遺跡
副題	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第80集
著者名	末木 健・野代幸和
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話番号	山梨県東八代郡中道町下曾根923 電0552-66-3881
印刷所	合資会社 ヨネヤ印刷所
印刷日・発行日	1993年3月20日 1993年3月31日
遺跡所在地	山梨県東山梨郡春日居町加茂字後町
1/25000地図名・位置	塙山 北緯35° 40' 09" 東経138° 39' 46"
主要な時代	奈良・平安時代
主要な遺構	住居跡5軒、溝2条、土坑29基 他
主要な遺物	土師器（壺・甕）、須恵器（壺・甕）、灰釉陶器（長頸壺）
特殊遺構	
特殊遺物	
調査期間	1992年12月1日～12月15日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第80集

### 桑戸（後町）遺跡

印刷 1993年3月20日

発行 1993年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 合資会社 ヨネヤ印刷

